

<『名古屋市緑図書館』2016年7月23日(351回)>

約9万冊の本のお出迎え!“本の森”『名古屋市緑図書館(篠山治人館長)』での朗読会でした。1972年(昭和47年)に開館した名古屋市緑区の『緑図書館』が、今夏7月12日にリニューアルオープン!緑図書館司書の宇佐見幸弘さんが記念行事として、この朗読会をいち早くゲットしてくれたのです。グッド・タイミング!

当日は、“何となくアチチで湿気あり”の気温30度。杓谷と名鉄『鳴海駅』で合流して目指せ会場!小高い山のでっぺんにある『名古屋市緑図書館』へと向かったのです。

11時40分頃に到着。周囲を見渡すと宇佐見さんが早々にお出迎え。早速、機材をエレベーターで二階の会場「第一集会室(長方形で約12m×6m)」へと搬入したのです。

“全館リニューアルオープン。”それこそピカピカのホヤホヤ!真新しい匂いに包まれています。天井と床、壁の上半分は白色、下半分は木目です。入口は二箇所。その他に大きなサッシ窓が二面。窓には、今回の公演に間に合うように暗幕が取り付けられ、もう“感動もの!”感謝、感謝の大感謝!!暗幕の有り無しで、大きく違ったのは言うに及ばず。

もう一つ嬉しいことに、朗読会に先駆けて、一階貸し出しカウンター前に『緑の木の気になる本』と題したコーナーを設けてくださいました。「木を植えた人」「いのちを守るどんぐりの森」の書籍、土屋敦資氏(緑区在住)の落葉をモチーフにした版画『森の記憶-kiriが育てる13-3』など、木をテーマとする作品が飾られ、朗読会への思いが伝わる企画です。

公演は夏の陽射しが強い1時30分開場、2時開演。12時前から仕込み開始です。

部屋の正面を朗読場所に設定。ところが、なんと!?!正面の壁には掛時計。“これは、いかん!?!是が非でも外したい”開演中に観客が辛抱しきれず、時計を見る事は必至。“泣く子と壁時計には朗読は負けるんです、はい!”絶対回避しなければと焦る朗読者。だが、まずい事に壁の中の電気コードとくっついて外せない。布や紙で覆うことはどうか?これも考えたのですが不自然な感じで断念。結果 “ええい、ままよ、そのまんまよ!”ということで無理矢理に決着。その後の準備は、暗幕からこぼれる外光を予め用意した黒幕を床に敷いて遮断。これで間違いなく完璧に暗闇はやってきます。暗闇の帝王、大満足!!

すでに約40席のパイプ椅子が並べられ、微調整を残すのみ。杓谷のオペスペースは客席後方。私の着替え兼待機場所も杓谷のさらに後方、扉で隔てた「第2事務室(資料置き場)」。

定員36人。この中途半端で奇怪な数字は?と宇佐見さんに聞くと「決められた定員なんです。」と当たり前の答え。“えっ、中途半端な36人が?”空間面積が約72㎡。2㎡に1人とするとちょうど数が合う。もしかして、そんな計算なのか知らん。不可解なままの本番!

2時を迎えたところで駐車スペースを探している参加者がいて、ちょっと待っての状態。2時を10分ほど過ぎた頃に、観客32人(男性12人)で漸くスタートしました。

今回の燭台下げは、元『緑図書館』スタッフの安達聡子さん。開始の合図を兼ねて杓谷の前方に仁王立ち!早速、照明が消えて音楽IN。蠟燭明かりの中、安達さん(女優でもあるそうです)曰く「しっかり上がっちゃったんですねえ」という歩き方(どんな?)で前方へ。では、お答えしましょう、二拍子のリズムの歩き方。何だか、この歩行に懐かしさを感じたのは私だけだったのでしょ?でも、上がった割には見事な蠟燭下げを披露。大満足で、私の出番となりました。

後方から「ある人が・・・」“おお~思った通り真っ暗だ、いい感じ”と、一人ごちて中央通路から朗読椅子の場所へ。朗読は「ゆっくりと感情を抑えて原点回帰」をテーマに前半は間を取り、読み進めることを心掛けたのです。会場は声を通り、雰囲気満点100%。最後を迎えるころ、壁を隔てた廊下でやや話し声。まあ、公演に支障無し、ホッ!です。

杓谷のライトアップは、朗読椅子を中心に特化して“集中光線”で締めくくりました。一区切りした所で、恒例のミニ朗読『福の花(田島秀樹 作)』を上演。5回目となる図書館での朗読会が無事終了。久しぶりの暗闇に小躍り!“朗読者が興奮したの巻”だったのです。